

多山健吾村議はいった。

「初瀬さん，それは違うと私は思うものであります。ちょうどいい例として，カワラ木の弥吉議員を見てもらいたいと考えます。あの人は周囲からワイワイまつりあげられて村会に首を突っこんだのはよろしいが，前任の議員に比べて，いまだに何もできていませんのであります。若さというものはあるときには強い力ではありますが，ある場所ではあまりにもマイナスとして働く面が少なくないのであります。そのところも，まだ若い

徳左右衛門さんには理解できないかも知れないのであります」

まだ若いといわれたことで，徳左右衛門はつむじを曲げてしまった。

「新立候補者には無限の可能性ががありますのに対しまして，現議員にはほとんど何もありません。いま多山健吾さんは私のことを若いといわれましたが，私は自分のことをもうそれほど若輩だとは思っておりません。それに，若いということ

文明を築き，社会を発展させてきたものは，常に若い力であったと思うのであります。それとも何でもありますか。多山村議は花ノ根発展に何らの力も貸したくはないというお考えなのでありますか」

徳左右衛門の口から文明論がとび出すとは思ってもいなかった健吾は，何やら頭がチカチカとおかしくなったものである。

「愚かしきことをいうものではありませんよ，

初瀬君」

健吾はひといき継いだ。

「私は花ノ根の発展を考えればこそ，新人よりは現職の方が強力だと申し上げているのであります。あなたのいうことはどこやら共産党かゼンガクレンに似ていて，それが気がかりであります。あの収入役がそのような政見であるとするならば，なおのこと私はあの新人を推薦する考えには同調できないのであります。」

どちらが正しいのか，この際だれにもわからず，双方に理屈がとおっているように思われてくる。

徳左右衛門に理を認める者は，徳左右衛門をゼン

ガクレンと非難した健吾を非難した。座は騒然としはじめた。

それまで黙っていた庄平が一同を押えた。

庄平が黙っていたのは、事のなりゆきに驚いていたからである。これまでこうした会合の席でこれほど激烈な論争が展開されたことはなかった。

「多山さん、徳左右衛門さんをゼンガクレン呼びわりするものではありません。私としましてはあくまで現職議員を推す考えであります、これは元村長としての、あくまで個人的な判断による

の橋に向かって群れをなしていた。徳左右衛門と原吉之助は行列の先頭に立って、憤懣やるかたなく大足に歩いた。行列の殿りは多山健吾で、彼はなるべくゆつくりと足を運び、先頭との間に距離をおこうとした。

列は自然と新人派が前に、現職派が後ろになり、真中で二つに切れた。みんな一様に今夜の論議に興奮していたのである。

庄平の前に残ったのは、茂太郎と恵吉であった。

「いかがが相成りましようや」

るものでありまして、反対する人にまでその考えを押しつけるものではありません。元村長としての私個人としては、花ノ根が一つにまとまった中で整然とした投票を行なうのが穏当であろうかと思料したにすぎないのであります。双方とも感情的にならずに、今夜のところは散会したいと考えます」

元村長としての庄平個人のことばをもつて一同は家路についた。

カミノイリやシモノカミへ帰る人たちは、谷川

恵吉はおずおずと庄平を見上げた。シゲはいささか当惑していた。昨年春先に徳左右衛門からジャガイモの種を二貫ほど借りて、まだ返してなかったことを思い出したのである。まさか徳左右衛門が収入役の方を支持するとは思ってもしなかったし、いまとなつては、自分に日当を払ってくれている現職議員が当選した方がいいとはどうも決定的には思えなくなったのだ。

「徳左右衛門はどうして収入役を支持することになったのであるか、シゲにはそれを調べてほ

しいものであります。恵吉君は、今夜反対派にまわっていたと思われる者のところへおもむいて、それとなく村が二つに割れるような投票はしてほしくないとのめめかしてきてほしいのである」

「それはたいへんに結構なことなのであります」

シゲは言いよどんだ。あす一日になって、まるでどういふことができるのかといたい気もあつたが、やっぱり二貫目の種イモのことが気にかかつた。二貫のジャガイモを返すのはやさしい。しかし種イモを借りたということは、それから収穫

くらいの見返りはしておくべきだし、それでどちらが当選しても庄平の面目がつぶれることはないであろう。統合中学校の講堂に設けられる投票所は、花ノ根の票がどう動いたかをどちらの候補者にも知らせはしないに相違ない。

「選挙もむずかしくなつたものであります」

庄平は庭先に出て小便しながら呟いた。

翌朝早く、シゲは徳左右衛門を訪ねた。そして、まずジャガイモの種イモを返さなかつたことの詫びをくり返し述べたあと、現職議員支持派に転じ

したイモも借りたものということになりはしないであろうか。

また貸してくれて、いままで一度も請求しなかつた恩義はどうなる。収穫したジャガイモ全部を返したからといって、それで済むものであろうか。

シゲの足は重かつた。

一人になつた庄平は、昔から三野家に任えてきた老人の男衆を呼んで、あすのうちに酒を一本ずつそれぞれの候補者の自宅へ運んでおくように命じた。双方から届けられた金品に対してそれ

てもらえないだらうかと切り出した。庄平はシゲにこうは命じなかつたのに、やっぱりシゲは動転していたのである。

「この徳左右衛門は男であります。一たん新人を推すと口にした限りは、とことんそれを貫いてみせる所存であります。もし多山健吾が収入役を支持する側になるといふのなら、私としては意地からでも現職議員のために奔走もいたしましようけれども、なんせ、あの健吾は公衆の面前で私のことを若僧といい、ゼンガクレンと

罵のしったのであります」

前夜ぜんや、文明論ぶんめいろんを展開てんかいした徳左右衛門とくざえもんにしては支離滅裂りめつれつの論旨ろんしだが、シゲは、この交渉こうしやうがこれほど難航なんかうするのはジャガイモの恨みうらみであると考えた。すると、だんだん持ち前の短気たんきが頭あたまをもたげてきたものだ。

「ほんのジャガイモ二貫にかんくらい、いつでも返し  
ましょう。あなたは分限者ぶんげんしやのわりにあまりにもケ  
チンボウであります」

これには徳左右衛門とくざえもんも怒おこった。実はシゲにジャ  
ガイモを貸かしたことなど、きょうのきょうまで不

覚かくにも忘却ぼうきやくしていた。そのために催促さいそくもしなかつたのであるが、

「私は二貫にかんのイモのことをいつているのでは  
ありません。一度いちどでも私がイモを返せかえといったこ  
とがありましたでありましょうか。そもそもイモ  
の借かりがありながら、かくのごとき不愉快ふゆかいきわま  
りない話はなしをもちこんできたあなたがいつそ私  
は恨めしい。私の好意こういは金銭きんせんには換算かんざんしてもら  
いたくないものであります」

と切り返かえした。忘れてさえいなければ、たとえ  
二貫にかんが一貫いっかんでも、返せかえといわない徳左右衛門とくざえもんでは  
ないのである。

これがまた、シゲにはこっぴどくこたえたのだ。

「どうも案ずるあんに、あなたは家屋敷いえやしきに火ひをかけ  
てもらいたいとおっしゃっているかに考えられ  
てなりません」

「やっぱりあなたはやくざでありました。火ひを  
つけるなら、イモをちゃんと返かえしてからにしてい  
ただきたいのであります。イモを貸かしたうえに  
火ひをつけられたとあっては、この徳左右衛門とくざえもんの男  
が立ちません」

と徳左右衛門とくざえもんはいった。

シゲと徳左右衛門とくざえもんは組くみずほぐれつともみ合いと  
なったが、昔むかしの喧嘩巧者けんかこうしやも寄年波よとしなみには勝かてず、  
若い徳左右衛門とくざえもんに組くみ敷しかれ、荒縄あらなわでしばりあげ  
られてしまった。シゲは「殺せころ、さあ殺せころ」と叫さけ  
だ。

「ジャガイモ二貫にかんで殺ころされては、このシゲの名なが  
すたろうというものでありますが、この期ごに及およ  
では生命いのちを惜おしみはしません」

シゲは目めに涙なみだを浮かべていた。負まけて口惜くちおしく  
もあつたが、選挙戦せんきょせん最後の日ひになって日当ひつとついちにちがふ  
をふいにしたのである。

現職議員がすんなり再選されたことを記述するのは蛇足であろうか。

徳左右衛門は自分がゼンガクレンといわれたことから、ゼンガクレンに対する認識を改めた。

犬井八郎は確かにゼンガクレンだったかも知れない。ゼンガクレンだったからこそ誠実な青年に育ったであろう。とすれば、ゼンガクレンを非難するのがおかしいではないか。八郎を製材工場に世話してやった自分の行為ほど、花ノ根の良識を示すものはないのである。

徳左右衛門は自分の良識にうつとりとした誇らしさを覚えた。この良識が、榎の茂太郎に対してはどれほどの非情さを発揮したか、ころりと忘れていた。

(以上8月13日放送分)